論　文

『職業としての学問』と大学闘争の新しい課題

―野口雅弘の「新訳」をめぐって―

“Wissenschaft als Beruf” und neue Aufgabe des Kampfs der Universitätslehrer

― Kritik über die Übersetzung von Masahiro Noguchi ―

野　﨑　敏　郎

要　旨

『職業としての学問』は，それが大学闘争論であるという認識を共有したときにはじめて理解できる著作である。ところが，野口雅弘が最近刊行した「新訳」にあっては，このことが認識されておらず，そのため文意が韜晦している。そこで，ヴェーバーの真意を明らかにすることが本稿の課題である。現代における職業は，もはや使命をもちえず，大学と科学の営為と科学者の存在とが危機に直面している。したがって，近代知の危機を打開することが大学に求められる。ヴェーバーは，この見地から，大学制度を改革し，大学人の資質を変革しようとする。実際，第二帝政期・ヴァイマル期において，各地の大学教員たちによる粘り強い闘争によって僥倖状況の打開が図られるとともに，ヴェーバーによって，近代知の呪力剥奪状況を打破する闘争もすすめられた。

キーワード：ヴェーバー『職業としての学問』，呪力剥奪状況，大学闘争

はじめに

筆者は，『大学人ヴェーバーの軌跡――闘う社会科学者――』（野﨑敏郎 2011）および『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版）』（野﨑敏郎 2016）の刊行後，近代ドイツの大学にかかわる諸問題をさらに掘りさげ，それと関連づけて，講演録『職業としての学問』の構想・射程・主旨・真価を再検討する必要を感じ，新資料の発掘に努め，その調査結果を『社会学部論集』誌上の拙稿中に公表している（野﨑敏郎 2016－）。

最近，野口雅弘が，この講演録の「新訳」を刊行した。ところが，野口にあっては，この講演録のもっとも重要な内容物であるドイツの大学問題にかんする理解が欠落しており，そのため，この講演においてヴェーバーがなにを主張し，聴衆にたいしてなにを訴えているのかが，現代日本の読者にまったく伝わっていない。大学問題にかかわるヴェーバー（とその同僚たち）の闘争は，百年後に生きているわれわれにとっても，優れた闘争経験としてのアクチュアリティを有しており，これこそが，いま『職業としての学問』を読む意義なのだが，そうしたアクチュアリティも意義も，野口は消しさってしまっている。そればかりか，野口は，奇怪な訳文・訳語変更を敢行し，これによって，原意

を著しくねじまげ，尾高邦雄らの旧訳以上に論旨が迷走している。

野口の「訳」の欠陥は多岐にわたっているが，それは，日本における旧来のヴェーバー誤読の深刻な問題性を反映している[1)]。彼の訳の誤りを列記することはできるが，むしろ，拙著を読んでいながら，そこにおいて筆者が指弾している従来の誤訳を野口がなぜ踏襲しつづけるのか，彼がなぜ新たな誤訳を捻りだし，なぜ迷走を繰りかえしているのかが大きな問題である。こうした問題に関連する基本的な論点については，『社会学部論集』誌上の拙稿において掘りさげているが，未完である。そこで，本稿では，拙著刊行後に発見した新資料をも援用しながら，野口が――あるいは従来の日本の自称訳者たち・解釈者たちが――陥っている錯誤の所在を明示し，彼ら（野口を含む）がけっして目を向けようとしなかった大学闘争論としてのこの講演録の真価を略述し，ヴェーバーの基本思想への視座をしめす。これによって，『職業としての学問』理解のための共通認識を醸成させようとするところに，本稿の狙いがある。

なお，本稿では，野口の陥っている数多くの誤りのごく一部を扱うことができたにすぎない。また，野口は『職業としての政治』も併せて訳出しているが，紙幅の関係で，本稿では，扱う対象を，基本的に『職業としての学問』に絞る。ただし，必要があって，文中で一箇所だけ『政治』から引用する。

1．演題と《職業＝召命》観をめぐって

講演企画の背景と経緯

この講演の演題そのものが問題を孕んでいる。この演題（Wissenschaft als Beruf）は講演企画者がつけたものである。筆者は，企画者であるイマヌエル・ビルンバウムとヴェーバーの動向を中心として，遺されている未公刊史料すべてを判読し，関係資料・文献も閲読し，講演の企画から実現にいたるまで，また講演録の刊行にいたるまでの過程を調べたが，この演題に，ヴェーバーのなんらかの意向が反映されているという形跡は認められなかった。野口は，この演題をヴェーバーがつけたと決めてかかっているが，なにを根拠としているのかが不明である。また野口は，Berufを「仕事」と訳しており，それは「天職や召命という意味合い」をもたせるためだそうだが[2)]（野口訳: 8 ～ 9頁），そもそもヴェーバーのBeruf概念にそのような意味合いがあるのかが大きな問題である。

ビルンバウムは，彼が所属する学生団体からの委嘱で，この講演企画を立てている。彼は，「学業と職業（Studium und Beruf）」にかんする報告を担当することになり，そこでは，純粋に学問的な研究目的（rein wissenschaftliche Studienziele）と，実務的な専門職教育（praktische Berufsausbildung）との区別を明確化することになっていた（Birnbaum 1974: 78）。彼は，この課題にもとづいて四つの講演を企画する。まだ職に就いていない学生側の企画であることを勘案すると，四つの講演名は，「就職先としての研究職（Wissenschaft als Beruf）」「就職先としての教育職（Erziehung als Beruf）」「就職先としての芸術職（Kunst als Beruf）」「就職先としての政治職（Politik als Beruf）」という意味である（MMSB/GK/B77）。ここに，「召命としての学問・教育・芸術・政治」という発想はない。

この頃ビルンバウムは，友人シュヴァープの職業＝疎外論を読んでいる。シュヴァープは，今日，精神労働に属する業種は，外的にも内的にも破綻して，そもそも職業として成立しえないのではないかという根本的な問題提起をなしている（Schwab 1917: 103 f.）。ビルンバウムは，この難問にたいする回答を求めて，シュヴァープの論稿中で引き合いに出されているヴェーバーに，この企画への協力を依頼することにした（Birnbaum 1974: 79, MWGI/17: 65）。この

経緯から明らかなのは，ビルンバウムもシュヴァープも，職業が「召命」であるなどという見解から遠く隔たっていることである。

ビルンバウムは，現代において，精神労働がはたして職業として成立しうるか否かを問題にして，四つの講演を開催し，それをまとめて『就職先としての精神労働職（職業としての精神労働）』という講演集を刊行しようと企てた。そこで彼は，1917年に，ヴェーバーとケルシェンシュタイナーに講演を依頼し，ヴェーバーがこれを引きうけた（野﨑敏郎 2016: 336 ～ 337頁）。あくまでもビルンバウムのもちかけた企画にヴェーバーが応じているのであって，四つの講演の演題はビルンバウムがつけたものである。

現代の職業にたいするヴェーバーのスタンス

この講演を引きうけたヴェーバーもまた，〈職業を召命として遂行する〉という禁欲的プロテスタンティズムの見地を奉じていない。それどころか，ヴェーバーにとって，禁欲的プロテスタンティズムの人格は「批判的克服の対象」であった（今井弘道 1988: 128頁）。《職業＝召命》観は過去の遺物であり，それはヴェーバーの職業観ではない。彼は，遠い過去の一時代において，《職業＝召命》観がどのような歴史的起動力となりえたかを論じたが，あくまでも研究対象として――しかも批判的な見地から――それを扱っている。彼は，現代において《職業＝召命》観が通用するなどという没歴史的迷妄とは無縁である。『職業としての学問』は，基本的に現代の職業を扱った講演であり，過去を振りかえる文脈以外において《職業＝召命》観の出る幕はない。

野口の口吻からは，〈義務としても召命としても学問活動に邁進せよ〉というのがこの演題の含意で，かつこの講演の主張だということになるかのようだが（野口訳: 8 ～ 9頁），ヴェーバーはそのような主張をなしていない。この講演内におけるいくつかの用例を点検しよう。

まず講演の冒頭で，「諸君の求めにおうじて」この講演をなすと述べられている。『職業としての政治』の冒頭においても同様である（MWGI/17: 71, 157）。この発言は，演題が企画者によってつけられたという事態を受けている。

Berufが「使命」という意味であると判断できるケースとして，たとえば「科学に向かう内的使命」という用例があるが（ebd.: 80），これは，科学に向かう内的使命について聴衆である学生たちが聞きたがっているという文脈であり，しかもこの段落⑬において，ヴェーバーは，そうした「使命」そのものに大きな疑義を呈している。さらに，進歩の系列に連なることによって，科学者がなにか有意味なことをなしているのかどうかを疑っている（ebd.: 86）。そして彼は，人間の生（せい）総体にとって科学にどのような価値があるのかと問い（ebd.: 88），科学史を点検しはじめる。そのなかで，彼は，「神への道」としての科学として定式化された《職業＝召命》観に触れている。そこで引き合いに出されているのはスワンメルダムである（ebd.: 91）。それに続けて，ヴェーバーは，神への道としての科学などという戯言は，今日においてはまったく問題になりえないと切って捨てている（ebd.: 92）。そして彼は，使命としての科学の意味にたいするトルストイの疑念を受けとめ（ebd.: 93），古いBeruf観を剥ぎとり，科学そのものが科学の意味を提示することはありえないことを縷々論じていく（ebd.: 93-95）。

みたように，《職業＝召命》観はスワンメルダムの見地であって，それははるか昔に亡びた迷妄であるというのがヴェーバーの評定である。ところが，野口は，こともあろうに，ヴェーバー自身を《職業＝召命》観の主であるかのように描こうとしている。そのため，訳文と野口の思い込みとのあいだに深刻な乖離が生じている。とくにその乖離がはなはだしいのが次の箇所である（野口訳: 55頁）。

「真の存在への道」,「真の芸術への道」,「真の自然への道」,「真の神への道」,「真の幸福への道」。こうしたかつての幻想は，すべて没落しました。このような内面的な前提のもとで，使命を受けた仕事としての学問の意味とは，なんなのでしょうか。

この箇所は，〈「真の神への道」等々の幻想が終焉を迎えたので，それでは使命としての科学[3]になにか意味があるのか，トルストイが主張するように，科学にはもはやなんの意味も使命もないのではないか〉という文意である。ところが，野口は，このBerufを「使命を受けた仕事」と訳してしまっている。野口によると,「使命を受けた仕事」は「天職や召命という意味合いが強い」場合の訳語だそうである（野口訳: 9頁）。ということは，野口の「訳」によると，〈「真の神への道」等々の幻想が没落したあと，神への道としての（＝召命としての）学問の意味はなにか〉という文脈になる。完全に意味不明であり，いま幻想として葬りさったはずの「神への道としての科学」という思想が，すぐさま亡霊のように復活しており，何度読みかえしても文意を捉えることができない。

野口の「訳」では,「召命」という含意をむりやり押しつけられた「仕事」という訳語が訳文の最後にいたるまで用いられているため，読者はひどく困惑させられる。ヴェーバーは，この講演中で，現代の研究職が，神に由来する使命も他の使命ももちえないことをくりかえし主張しており，段落㊳の冒頭では，今日の科学は，恩寵の施しなどではない専門的な職業にすぎず，この所与の状況からわれわれが脱出する術はないとまで明言して念押ししている（MWGI/17: 105）。ところが, 野口の「訳」にあっては, けっして召命を担いえない現代のBerufが延々と召命を担うことにされつづけているのである。これは《発狂訳》と評するしかなかろう。

演題およびBerufの含意にかんする結論

「召命」問題，および訳語問題にかんして，Berufを「仕事」と訳すのは不適切であり,「仕事」に「召命」という意味を含みもたせることも不適切であり，ヴェーバーがこの講演録において《職業＝召命》観を開陳したとする野口の解釈には根拠がない。職業が召命であるかのような妄念は，現代においてはもはやまったく成りたちえない。現代の大学にあっては，近代知の諸矛盾が噴出しており，これに対峙し闘争する新たな知性をいかに生みだすのかが，ヴェーバーにとって重要な課題である。

2．使命喪失の時代における科学と科学者

科学観と現世観の問題

トレルチが鋭く指摘したように，神に疎遠な時代において, 現代人は, ゲーテが『ファウスト』末尾においてしめしているような信念と，職分への専心による自己確証という境地とを，もはやもちたくてももつことができない（ETGS4: 365, 野﨑敏郎 2016: 391 ～ 392頁）。それどころか，職業労働に痙攣的にしがみつくことは，精神の充足ではなく破綻をもたらす。周知のように，ヴェーバー自身がそれを体験している。それは，精神神経疾患として顕現し，亡くなるまで二十年以上にわたって，彼を苦しめつづけたのである[4]。

ヴェーバーは，『職業としての学問』において，〈職分への専心による自己確証・充足はけっして得られないが，それでもそれに痙攣的にしがみつき，私のように精神神経疾患に罹りなさい〉と主張しているのではない。逆に，大学と科学の営為と科学者との三者が大きな危機に直面している今日，その危機にいかに立ちむかうかを論じている。その背後には，この三者がいかに変容・変質を遂げてきたのかにかかわる歴

史的問題意識がある。この講演中に登場するスワンメルダム，ゲーテ，ニーチェ，トルストイを，ヴェーバーがいかに評しているのかを点検し，ヴェーバー自身の時代精神の所在をみよう。

スワンメルダムの信念は，十七世紀における《職業＝「召命」》観の素朴な表明であり，そこにおいて，信仰と職業（科学研究）とは不可分に結合されており，彼は，この信仰に立脚し，心安んじて科学研究に専心することができた[5)]。この事態について，ヴェーバーは，「今日（こんにち），『科学的真理そのもののためにそれを探究すること』だと言われていることを，たとえばスワンメルダムは，その当時の表現法で，『一匹の虱の解剖における神の英知の証明』と言ったのであり，索出的原理としての神様は，当時はそれほど有害な機能を果たしてはいなかった」と評している（WL6: 423）。この評言は，あくまでも「当時」の思潮にかんする醒めた歴史的価値査定であって，ヴェーバーは，現代においてもなおスワンメルダムの信念が妥当・通用するなどという異常な主張をなしているのではない。

すでにゲーテにあっては，当然にも，スワンメルダムの信念を共有することができなくなっていた。ゲーテは，人間の業（わざ）としての近代科学も近代思想も，信仰とは相容れないものと認識している[6)]。そしてゲーテは，それでもなお信仰に生きようとする。そこには，現世生活（世俗の生）にたいする根本的諦念があり，人間の業は，信仰とは無縁なものとみなされる。ゲーテが，現世において自分の持ち分に専心することを主張するのは，その献身によって神に近づくためではない。現世は無意味であり，無意味なものに拘泥することなく，自分の持ち分をみつけて現世を生きるのが理に適っているという処世訓としてである。ゲーテにあっては，現世における営みが彼岸と結びつけられることなく，彼岸は，現世の諦観的否定のうえに成りたっている。現世における「一切の移ろいゆくもの」は「影像（Gleichnis）〔＝仮象〕」にすぎないのであり，彼岸では「言表不能なもの」が成就する（GWH3: 364）。このように，ゲーテにあっては，すでに古い《職業＝「召命」》観は崩壊しており，職業と神とは分裂している。神の眼差しの下で持ち分に専心せよというゲーテの思想は，こうした分裂認識にもとづいているのであり，それは《職業＝「召命」》観とは異質のものである[7)]。

ゲーテのこの思想を拒絶したのがニーチェであった。ニーチェは，未来の詩作について語ったなかで，『ファウスト』第二部の表現様式を高く評価しながら，同時に「まさにこの著作が有している思想」を断固として拒絶することを明言している（NWS3: 35）。また，いま引用したように，『ファウスト』の終結部では，「一切の移ろいゆくもの」が「影像にすぎない」とされ，否定されているが，これにたいして，ニーチェは，「一切の移ろわないもの」のほうこそ「影像にすぎない」と，ツァラトゥストラの口を借りて揶揄している（NSWK6: 91）。ゲーテにおける現世的なものの否定と，ニーチェにおける彼岸的なものの否定との思想的対立があざやかである。そして，ヴェーバーは，この点にかんしてはニーチェの側に立っている。

しかしニーチェは，現世における社会変革の諸問題にかんする視座と方法論をもたなかった。これにたいして，そうした変革実践への視座を定立し，しかも現実にそれを実践したのがトルストイである。トルストイは，信仰を復権させようとしており，この点でニーチェと鋭く対立する一方で，現世にたいして諦観的に振るまうゲーテの態度を斥け，社会変革のための実践を志向した。ここに，ヴェーバーがトルストイを高く評価する理由がある[8)]。トルストイの著作中では，いうまでもなく『なにをなすべきか』がもっとも重要であり，『職業としての学問』の後段の内容は，この著作にたいするヴェーバーの応答を中心としている。これについては，拙著中随所で立ちいって考察したので（野﨑敏

郎 2016)，ここでは繰りかえさない。

現代科学にかんするヴェーバーの立場

トルストイの実践は，神秘主義の模範たるべきものだが，ヴェーバーはこの立場を採らない[9)]。トルストイの行動は首尾一貫したものだが，それが現実に変革のための効力を有していたとは考えにくいからである。ヴェーバーはリアリストであり，近代世界の諸問題を見据えながら，大学の現実的改革実践に従事し，政治変革の方向をも探りながら，青年層との対話を重ねていくのである。

こうしたヴェーバーの活動の一端をしめしているのが，ほかならぬ『職業としての学問』である。神に疎遠な時代において，科学は，人間にとって，なにか意味があるのか。現代科学は，もはやなんらかの「使命」という意味をもちえない技術学に堕している。それでは科学を葬りさるべきなのだろうか。この講演録には，こうした難問に取りくんでいる彼の姿が活写されている。渡辺金一は，トルストイの詰問に真摯に向きあいながら，なおも現代における科学研究の意味を見出そうとするヴェーバーの苦闘を追体験し，ヴェーバーが論を巡らせているなかで発した「さいわいにも（glücklicherweise)」という一語に，科学の職分がなお残っていたとほっと胸を撫でおろす彼の姿を読みとっている（MWGI/17: 103, 渡辺編: 81～82頁)。

こうした難問を，ヴェーバーがどう解いたか，またそれを今日（こんにち）われわれがどう受けとめるべきかは，別途（現在執筆中の拙稿中で）扱うことにしているが，ここで基本認識のみしめしておくと，ヴェーバーにとって，科学は，それ自体がなんらかの使命や価値や意味を有するものではなく，それはひとつの道具である。この道具は，あくまでも人間の従属物であって，神の賜物ではない。当時のドイツ人のあいだには，Berufという語に「召命」という含意の残り滓がかろうじて残っていたようだが（大村眞澄 2018: 49頁)，ヴェーバーは，これを完膚なきまでに破砕し，科学を人間の道具として，あるいはヴェーバーの論旨に厳密に則ると，闘争する人間の道具として再定義する。現代科学は，たしかに使命を喪失した技術学だが，道具としての有用性はある（MWGI/17: 103f.)。そこで，科学を闘争の道具として使いこなす人格が――禁欲的プロテスタンティズムの人格とはまったく別の人格が――重要な問題となる。そうした人格を育成するのが大学の新しい役割である。では，現実の大学はそうした役割を果たしているか，果たしていないとすれば，大学をどう改革するか――これが，『職業としての学問』におけるもっとも重要な考察課題である。そこで，当時のドイツの大学をヴェーバーがどうみていたか，またひとりの大学人として彼がどう行動したかが，われわれの関心の対象となる。

3．ドイツの大学問題とヴェーバーの闘争

教授資格審査と私講師身分の問題

ドイツの大学問題は，特殊な歴史的背景をもち，また問題の顕現形態も多岐にわたっているが，ここでは，『職業としての学問』においてとくに明示的に取りあげられている人事問題を中心に略述する。というのは，人事にあっては，大学制度の問題と大学人の内的態度決定の問題とが凝縮したかたちで絡みあって顕現しているからであり，また，野口がこの問題をひどく歪めているからでもある。

教授資格審査と私講師身分にかかわる諸問題は，ドイツの大学問題の縮図であり，これを正確に理解することは，『職業としての学問』を理解するために不可欠である。当時の教授資格申請者は，まず①当該学部の分野代表者（Fachvertreter）との協議によって，論文の提出許可を得て，②浩瀚な論文を執筆し，それをひとつの書物の体裁にまとめて刊行し，その書

物を配付したうえで，③学部教授団列席のもとで試験講義をなし，列席者からの数々の批判に応答し，合格判定を獲得しなくてはならない。ところが，尾高以下従来のすべての自称訳者たちは，あたかもこの審査が形式的で簡単なものであるかのように偽装してきた。野口も同様である。そして，〈形式的な審査〉という誤訳を正当化するため，尾高は，「著述か」「たんに形式的な試験にもとづいて」学部教授団の選考と承認を得るだけで教授資格が取得できるかのように歪曲した（尾高訳: 10頁）。他の訳者たちも尾高のこの誤訳に追随しており[10]，なかでも中山元は，「著書の提示か，かなり形式的な試験に合格した後に，担当の部門の長と話し合」うとまで歪曲を増長させている（中山訳: 162頁）。そして野口は，明らかにこの中山訳を下敷きにして，次のように誤訳している（野口訳: 15頁，下線は引用者による）。

> 若手〔研究者〕は本を出版し，そして学部のたいがいは比較的形式的な試験をパスする。その上で当該分野の責任者と協議し，その承認を得て，どこかの大学で教授資格を取得する。

どの邦訳も，教授資格審査の手続と順序にかんしてひどく曖昧で，また大きな混迷に陥っているが，試験をパスしたあとで分野代表者と協議するなどという珍訳を捻りだしたのは中山と野口だけである。

この問題には，すでに渡辺金一が決着をつけている。彼の注釈を読もう（渡辺編: 62頁）。

> 受験者はまず当該Fachvertreterと相談しその承認を得たのちに（nach Rücksprache und mit Zustimmung des betreffenden Fachvertreters），Habilitationsschrift（論文）を提出して審査され，Fakultätの教授たちの居並ぶ前でProbevorlesung（試験講義）を行ない，Kolloquium（口述試験）をうけた（auf Grund eines Buches und eines meist mehr formellen Examens vor der Fakultät）。大部分の翻訳はこの点が明確でない。

渡辺は，このように明快に指摘し，お粗末な誤訳群の息の根を止めた。それにもかかわらず，野口は，またしても古い誤訳の隊列に加わったのである。このnach Rücksprachеは，「協議にもとづき」または「協議のあとで」という意味であって[11]，どんなに曲解しようとしても，「その上で（＝あとで）協議する」という意味にはならない。もしもnach Rücksprachеが「あとで協議する」という意味なら，after schoolは「放課後」ではなく「あとで学校に行く」という意味になってしまう。中山と野口は，こんな初級文法の初歩の初歩で躓いており，論外である。

もうひとつ重大なのは，野口が，「試験」と「承認」のあと，「どこかの大学で教授資格を取得する」と誤訳していることである。この「どこかの大学」という誤訳は，ほかには見当たらないので，野口の「創作」である。野口の与えた文脈では，教授資格審査ののち，審査がおこなわれたのとは別の大学でも教授資格を取得できるという意味になってしまう。あまりにも非常識な誤認である。ヴェーバーが「ひとつの大学において（an einer Universität）」[12] と述べているのは，教授資格審査がおこなわれた大学でのみ私講師として講義ができることをしめしているのであり，その資格をもって他の大学で講義をすることは（基本的に）できない[13]。

教授資格審査にかんする記述にかんして，歴代の邦訳群はどれもひどく混乱しているが，いまみたように，そのなかでも野口の「訳」は最低にして最悪である。渡辺の懇切な注解がしめされたのは44年前のことであり，また，野口が読んだはずの拙著中で，筆者は，関連規程や事例を挙げ，また渡辺の注解にも参照を促しながら詳細に解説した（野﨑敏郎 2016: 9～19頁）。それにもかかわらず，野口が古い誤訳にしがみ

つき，かつそこに新たな曲解をも持ちこんでいるのは，意図的な仕業だと判定せざるをえない。野口のこうした歪曲の意図は，ドイツの大学問題の隠蔽である。野口は，当時のドイツにおける教授資格審査が形式的なものにすぎず，その資格取得は容易で，しかも審査をパスすれば任意の大学で私講師として勤務できるかのような途方もない虚構をつくりあげ，この虚構によって，ドイツの私講師問題をさほど重大でないものに見せかけようとしているのである。

「サイコロ賭博」という珍訳の意図

この隠蔽・歪曲工作は，野口が殊更に自慢してみせている「サイコロ賭博」という珍妙な誤訳の問題と係わっている。「僥倖（HasardまたはHazard）」を，その語源がサイコロであることから「サイコロ賭博」と訳しているだけの話だが（野口訳: 22～23頁），そのために，ヴェーバーにおけるこの語が社会的行為の連鎖という意味を有していることが見失われてしまっている。とくに次の箇所がひどい（野口訳: 23頁）。

> 〔セレクションにおいて〕優秀さそれ自体ではなく，サイコロ賭博がこんなにも大きな役割を果たすというのは，人間的なものだけの問題ではないし，けっして主として人間的なものの問題というわけでもありません。

完全に意味不明である。「サイコロ賭博」だけの問題でなく，Menschlichkeitenが「人間的なもの」と誤訳されていることもあって[14]，何度読みかえしてもなにも頭に入ってこない。筆者は，ヴェーバーが関与したさまざまな人事選考過程とその内情について，第一次史料に依拠してくわしく調査し，熟知しているが，その筆者がこの訳文を読んでも，いったいなにを言おうとしているのか皆目見当がつかなかった。この〈人事選考においてサイコロ賭博が大きな役割を果たすのは，主として人間的なものの問題ではない〉というのがいかなる事態を指ししめしているのかは，まちがいなく誰にも――野口自身にも――理解できない。

この箇所は，人事選考において，才能ではなく僥倖が重要な役回りを演じてしまうのが，人事にかかわっている人たちの人間的な弱さや過誤のせいではないという意味である。べつに難所ではなく，「僥倖」と訳されていれば，〈行為の織りなす綾が予想できない結果を生むのは当事者たちの不手際のせいではない〉という意味がきちんと伝わるのに，「サイコロ賭博」と訳されてしまっているため，読者は，「サイコロ」と「人間的なもの」との繋がりがわからず，そこからいかなる文意も汲みとることができない。

このように野口が無理な訳語変更を敢行しているのは，ドイツの私講師問題は，さほど重大でないうえに，それは，サイコロのように，まったくの偶然に委ねる以外にないから，その問題に取りくみ，大学のありかたを変革しようとしても無駄だという野口の仕立てたストーリーに合わせるためである。

人事選考にかかわるヴェーバーらの闘争

では，ヴェーバー自身は，野口のように，この問題を「サイコロ賭博」のようなものだと考え，それにたいする闘争を放棄していたのだろうか。

私講師任用と正教授人事をめぐる偶発的諸事情は，社会的行為連鎖の好例であり，そこにもたらされる結果は，たんなる偶然の産物ではなく，関係者たちのさまざまな意図が絡みあったことによって生じた結果であり，しかも多くの場合，意図の連鎖であるにもかかわらず意図されざる結果が生じている。ヴェーバー自身，ハイデルベルク大学におけるクニース後任人事にかんして，他の候補者の動向を吟味し，各候補者の意向表明を推測し，またバーデン政府の出方を予測して，自分が選ばれる可能性を冷徹に考察している（MWGII/3: 223f.）。1896年の時

点で，すでにこうした事象における僥倖の支配を感得していた彼は，その不条理な状況の下にあって，いかにして最善の結果を導くことができるのかを見極めようとしていたのである。

このように，「僥倖」は，人間協働の招く偶発性をしめしているのであって（MWGI/17: 76），それは，サイコロの偶然性とはまったく異質である。サイコロなら諦めるしかないが，ヴェーバーは，大学人事にかんするこうした状況を打開するための闘争を，諦めることなく生涯貫いた。

ヴェーバーは，バーデン政府から優秀な研究者を紹介するよう求められると，ⓐユダヤ人のリストとⓑ非ユダヤ人のリストの二つのリストを作成・提出した。「つねに，リストⓐの最下位の者はリストⓑの最上位の者よりも優秀だ。しかし彼ら〔＝文部行政担当省の担当官たち〕がリストⓑ〔のみ〕に手を伸ばすであろうことは確実だ」（Baumgarten 1964: 611）。優秀な人物が，ユダヤ人だというだけで排斥されていることから，ヴェーバーは，政府にたいして，こうしたかたちでアピールしていたのであり，このこと自体が，彼の闘争の一部をなしている[15]。

この問題を考えるうえで，ヴェーバーとハイデルベルク大学の同僚たちの取り組みは重要な意義を有している。同大学哲学部には，かなり早い時期からユダヤ系の研究者たちが勤務しており，学部の教授たちは，彼らの待遇改善に取りくんでいた。ここでは4名を取りあげる。

比較言語学者ザロモン・レフマン（ハイデルベルク在職1866～1912年）は，長年にわたってハイデルベルク大学で教鞭を執っていたが，他大学からの招聘はなく，員外准教授のまま時を重ねていく。彼が七十歳を迎えたとき（1901年），哲学部は，多年の功績を認め，彼を嘱託教授に任ずるよう特別評議会を通じて政府に提案し，承認されている（GLA235/2226）。この嘱託教授という職位は，固定俸がつき，その地位は正教授と同格とみなされている。

経済学者エマヌエル・レーザー（ハイデルベルク在職1873～1914年）の教育能力は，カール・クニースによって高く評価されていたが，長年にわたって冷遇されれており，それは哲学部の教授たちの義憤を招いていた。そこで学部は，1898年に，彼を，員外准教授から員内准教授へと昇格させようと試みた。員内准教授も固定俸がつく職位である。しかしこの案は政府に拒否され，実現しなかった（UAH/IV-102/130: 80-82, 野﨑敏郎 2011: 105～111頁）。

フリードリヒ・グンドルフ（ハイデルベルク在職1911～1931年）とエーミール・レーデラー（ハイデルベルク在職1912～1931年）[16]は，それぞれ1911年と1912年にハイデルベルク大学で教授資格を取得し，私講師・員外准教授を経て，1920年8月28日付で，両者同時に員内准教授に昇任している（UAH/PA4780）。かつてのレーザー昇任案で実現できなかったことが，ヴァイマル期になると実現されているのである。員内准教授は，もともと正教授に昇任できる職位であり，両者ともその後正教授になっている。

ハイデルベルク大学哲学部は，長年にわたって，正教授への内部昇任を避けてきており，歴代の正教授たちは，他大学から招聘された人々である。これにたいして，グンドルフとレーデラーは，私講師→員外准教授→員内准教授→正教授というルートの内部昇任のみによって正教授ポストを獲得している。これは，ヴァイマル期初期においてもなお他大学で正教授職を獲得することが困難だったユダヤ系研究者にたいして執られた例外措置だと推察される。こうした事情から，この学部の教授たちは，長年にわたる慣行を破り，それを政府に認めさせたのであろう。

ヴェーバーとその同僚たちの長年にわたる粘り強い闘争は，このように実を結びつつあった。そして彼らのこの闘争は，『職業としての学問』における「僥倖」論とぴったり合致している。ヴェーバーは，この講演録のなかで，ユダヤ系

研究者たちが置かれている不条理で過酷な運命を鋭く剔った。それは他人事としての批評ではない。ヴェーバー自身が，このユダヤ系研究者の待遇を改善すべく，同僚たちと協議を重ねて知恵を絞り，可能な手段をすべて動員して旺盛に取りくんでいたのである。

もうひとつ重要な史実を紹介しておく。1905～07年頃，ハンブルク市およびハンブルク学術財団は，新設されるハンブルク拓植研究学院に正教授として招聘する経済学者を探し，自薦・他薦の候補者にかんする書類を集めていた。同時に，ハンブルク市の高等教育担当参事官マックス・フェルスターは，各地の大学に直接出向き，そこに勤務している経済学者たちにかんする各種の所見を集めていた。その作業のなかで，フェルスターは，ハイデルベルク大学哲学部私講師エドガル・ヤッフェ（改宗ユダヤ人）にとくに注目し，その業績・識見・性格を，また政治的見地と社会政策上の立場を吟味したうえで，適任と認め，ハンブルク市にとって有益な人材だとして，1907年3月6日付ハンブルク市長宛報告書においてつよく推薦している（StAH/361-5I/1201: 113f.）。

ヤッフェのハンブルク招聘案は結局実らなかったが，この内部文書から，第二帝政期の官僚層のなかにも，フェルスターのように，ユダヤ人問題にかんして開明的な人物がたしかに存在したことを確認できる。

この時期に，大学教授層・官僚層それぞれにおいて，新しい気運が生まれつつあり，僥倖状況の打開への道が切りひらかれつつあった。その素地のうえに，ヴェーバーの活動と『職業としての学問』が存立している。このことを考えると，大学における人事選考問題を「サイコロ賭博」などと呼んで冷笑した野口がいかに無知蒙昧であるかが明白である。

ヴァイマル期における僥倖状況の深刻化

しかしながら，ヴェーバーの死後，ドイツの諸大学における僥倖状況はさらに深刻化したようである。ユダヤ人でなくても，教授資格審査に難渋し，結局失敗したひとつの事例が，そのことをしめしている。

詩人であり，ルネサンス文化史研究者でもあるパーシー・ゴートハイン[17]は，1931年6月に，知己の文部官僚カール・ハインリヒ・ベッカーにたいして，自分がフランクフルト大学で教授資格を取得するための仲介を依頼している。ベッカーは，これを受けて，フランクフルト大学の史学分野代表者であるヴァルター・プラッツホフに書簡を送り，ゴートハインの教授資格取得にたいする助力を依頼する。プラッツホフは，この依頼を受けて，調整のために動き，またゴートハインのフランクフルト訪問に応じ，短時間ながら面会する。この件にかんしてベッカーに報告したプラッツホフの書簡（6月30日付および7月19日付）を以下に要約する（GStAPK/VI. HA, Nl Becker, Nr. 2343）。

本学の史学分野には，すでに正教授３名，嘱託教授２名，私講師４名がいて，この陣容は大規模大学並みであるうえ，目下２名が教授資格を申請中である。この状況下で，新たにゴートハインを受けいれるのはむずかしい。ルネサンスおよび人文主義を専門としているのはエルンスト・カントロヴィッツ[18]であり，次学期に向けて，彼は，講義のみならず演習においてもこの論題を扱うことを予告しており，ほかにもこれを講義で扱う者がいる。学生は実科高等学校出身者が多く，ラテン語とギリシャ語がおぼつかないので，本学でルネサンス期の問題に取りくませるのは非常にむずかしいとカントロヴィッツは嘆いている。以上の諸事情から，ゴートハインが本学で教授資格を取得して講義活動をおこなうことにかんしては懸念が大きい。

この回答書簡にしめされているように，まず分野代表者が，①申請者がその学部に教授資格請求論文を提出することを承認し，かつ②これから書かれようとする教授資格請求論文の内容

を承認したときにはじめて，教授資格審査手続が開始される。

分野代表者がこの二つの承認をなす基準がどこにあるのかを，プラッツホフの対応はしめしている。ルネサンス期にかんする講義の開講がすでに予定されているから，それと内容が重複する講義をゴートハインが開講することは，学生にとって利益にならない。むしろ，既存の講師たちが講義等において展開しない内容を学生に提供しうる人物が私講師にふさわしい。また，学生たちの多くは古典語に通じていないので，教育活動上の困難が大きい。プラッツホフは，「才能に恵まれているが風変わりな男」であるゴートハインの繊細な気質に接して，いっそう大きな懸念を抱いた模様である（6月30日付書簡）。おそらくほかにもさまざまな配慮ないし思惑が絡んでおり，とりわけカントロヴィッツへの配慮から，プラッツホフは，ゴートハインの申請を謝絶することに決めたのであろう[19]。

それにしても，いまみているケースのように，申請しようとする者と既存の講師たちとの研究・教育内容が重なっていると，申請そのものを断らざるをえない。したがって，その学部の既存の講師たちと補いあう領域を専門とする申請者が，教授資格審査条件に適合することになるが，そういう微妙なマッチングが成りたつケースが，いったいどれだけあるのだろうか。ここに，教授資格申請者特有の困難がある。

ベッカーは，第二帝政末期からヴァイマル期にかけて，ドイツの大学行政においてきわめて重要な役割を担った人物だが[20]，彼の手腕をもってしても，一大学の分野代表者の意向を変えることはできなかった。またベッカーは，大学における慣例や規則を破ってまでみずからの意向を押しとおすことをしない人物である――そうした《横紙破り》をしばしば敢行したアルトホフとは異なって――。こうして，ゴートハインは，フランクフルト大学に教授資格を申請するにいたらなかった。そこでは，申請に先立って，まず分野代表者との協議がなされ，しかもその分野代表者の意向が決定的な意味を有していたことがわかる。

ユダヤ系の研究者・芸術家たちの進出

この件とかかわってもうひとつ重要なのは，第二帝政期・ヴァイマル期に，ユダヤ系の研究者・芸術家たちが，さまざまな方面で活動の場を獲得しつつあったという事実である。いまみたように，カントロヴィッツがフランクフルト大学で教鞭を執っているほか，たとえばフランツ・シュレーカーが1920年から，アルノルト・シェーンベルクが1926年から，プロイセン芸術アカデミーで作曲を教えている[21]。また，すでにみたように，ハイデルベルク大学哲学部における取り組みにはめざましいものがあった。

グンドルフ，レーデラー，カントロヴィッツ，シュレーカー，シェーンベルクのようなユダヤ系の研究者・芸術家が，ドイツ各地の教育機関で要職に就いて活動していること自体が，ユダヤ人差別を撤廃しようと尽力してきた第二帝政期・ヴァイマル期における各大学の教員たちと，ベッカーのような開明的な文部行政幹部との人間協働の成果である。僥倖に支配されている大学・大学人の状況を打破しようとするヴェーバーらの長年にわたる粘り強い闘争は，たしかに重要な成果を挙げつつあったのである。

第二帝政期・ヴァイマル期におけるこうした成果は，ナチス期に蹂躙される[22]。しかし，ヴェーバーを含むドイツの大学教員たちの営為が，ドイツ大学史にとって重要な意義を有し，戦後の――現代にいたるまでの――ドイツにおける大学運営・大学教育・大学行政の礎のひとつとなっていることは，言うまでもなかろう。

「サイコロ賭博」問題にかんする結論

この史実・事績に照らしてみると，野口が，大学人事にかかわる僥倖状況にたいして「サイコロ賭博」などという珍無類の訳語を与えた意

図がはっきりとわかる。野口は，大学人事における僥倖状況を，サイコロのように，ただ指をくわえてみていることができるだけの偶然状況であるかのように描き，それによって，この僥倖状況にたいする闘争などありえないという誤認へと読者を導こうとしているのである。野口は，「サイコロ」という異様な誤訳によって，ヴェーバーをはじめとするハイデルベルク大学哲学部の教員たちの――また他の大学の教員たちの――闘争を嘲笑・愚弄し，僥倖状況にたいして彼らが敢行した闘争が目にみえる成果を挙げつつあったという重要な史実を否定した。その意味で，「サイコロ賭博」という誤訳は，一種の歴史修正主義の産物である。

4．ヴェーバーの思想と行動からなにを学ぶか

ヴェーバーの闘争と『職業としての学問』

ヴェーバーの闘争は，一方では，文部行政担当省にたいする止むことのない挑戦として顕現しているが，他方，彼の批判の鉾先は，大学教員の堕落と腐敗にも向けられている。とくに顕著なのが，第２回ドイツ大学教員会議（1908年9月）における彼の発言である。

彼は，事前に弟と入念に打ちあわせたうえでこの会議に参加し，社会主義者たちが大学の教壇から追われようとしている事態について問いかけた。ところが，参加者のなかに，大学の講師となっている者を，その政治的見解を理由として処罰することをほのめかす教授がいた。これにたいして，ヴェーバーは，信条詮索をするような者は「ごろつき（Lump）」だと罵倒した（Verhandlungen II: 22）。この罵倒された相手が法制史学界の重鎮であったことから，ヴェーバー批判が起きるが，彼はこの言を撤回しなかった。そして，この会議は不毛だったとして，激越な批判論説「大学の教職の自由」を公にする（MWGI/13: 128-138）。この論説が『職業としての学問』の原型である。

トルストイとの対論の意味

ヴェーバーの大学闘争論においてとくに重要な意味をもっているのは，トルストイの『なにをなすべきか』における（また他の著作における）科学批判である。すでに拙著中で詳述したので，ここでは具体的な言及を避けるが，トルストイは，資本家と国家の手先にすぎない科学者たちの自己欺瞞を徹底的に追及した。さらに彼は，現世変革こそが自分に与えられた使命であると自覚し，それを実践するとともに，その変革の取り組みが挫折を余儀なくされると，みずからの所有している資産をすべて放棄し，死出の旅に出た。現世変革への契機を有し，かつそれを具体的に――文字通り生（せい）を賭して――実践したトルストイの営み――とりわけその最後の日々の行動――にたいして，ヴェーバーは最大級の賛辞を呈している（MWGI/15: 97f.）。これが，『職業としての学問』におけるトルストイとの長い対論に結びついている[23]。

ゲーテにもニーチェにも，《現世の具体的変革実践への行動的契機》はない。この点で，トルストイは，この二者とは鋭く一線を画している。ところが，従来の日本の自称訳者たち・解釈者たちは，《トルストイ的問題設定》《トルストイ的変革行動》をみようとせず，そのため当然にも，これにたいする《ヴェーバー的問題設定》《ヴェーバー的変革行動》を見失っていた[24]。これでは，そもそも『職業としての学問』を読んだとは言えない。たとえば，出口勇蔵がこの講演録に与えた奇怪な解説文は，出口がなにを見失っていたのかを赤裸々に物語っている。出口は，大学において「辛抱づよく誠実に研究をすすめてゆけば，道はおのずと開けてゆくであろう」とヴェーバーが説いているかのように「解説」している（出口訳: 441頁）。驚くべき迷妄であり，ヴェーバーの論旨を正反対にねじまげている。ヴェーバーは，誠実に研究をすすめて

いても道は開かれないと認識している。むしろ，主観的には誠実に研究をすすめているつもりでいる自己欺瞞の主（ヴェーバーの指弾する「ごろつき」）が跋扈するのが，近代知の大きな問題のひとつである。必要なのは，危機の時代における知と教育のありかたを探求し，内に向かっても外に向かっても，そのための改革を求めて実践をなし，かつそれを検証することである。

呪力剥奪状況にたいする闘争

トルストイは，現代科学の存在理由そのものにたいする根本的な疑念を呈しており，それはヴェーバーの科学観に大きな影響を与えた。そしてヴェーバーは，トルストイの反科学論を踏まえて，『職業としての学問』の段落⑲において，科学信仰へと傾斜していく現代人の精神の劣化・腐朽化を，「呪力剥奪」の状況として提示した（MWGI/17: 86f., 野﨑敏郎 2016: 145頁）。

> 主知化と合理化との増大は，人間が置かれている生活条件にかんする全般的知識の増大を意味するのではありません。そうではなく，それはなにか別のことを意味しています。つまり，もしも欲するとすれば（*wollte*），ただそれだけで，いつでもそれを学び知ることができるかのように（*könnte*）〔短絡的に〕思いこむか信じこむことを，つまり，その内部で作用する神秘的で計測不能な力など原理的に存在しないなどと（gebe）思いこむか信じこむことを，つまり，それどころか――原理的に――計測によって万物を統御できるなどと（könne）思いこむか信じこむことを意味しているのです。じつにこのことが現世の呪力剥奪を意味しています。

ここに定式化されている呪力剥奪状況を打破し克服することが，ヴェーバーにとって重要な目標のひとつである。ところが野口は，この箇所を正反対にねじまげている。「もしも欲するとすれば」からあとの部分を引用する（野口訳: 43頁，下線は引用者による）。

> 知りたいとさえ思えばいつでも確かめることができるだろうということ，したがって〔電車の運行に〕入り込んでいる，秘密に満ちた，計算不可能な力など原理的に存在しないということ，むしろすべてのものを原理的に計算によって支配できるということ，こうしたことを知っており，また信じている，ということです。これが意味するのは，世界の魔法が解けるということです。

尾高の初訳以来受けつがれてきた誤訳を，野口は忠実に受けついでいる。つまり，野口は，この文中で用いられているwollte, könnte, gebe, könneの四つの接続法（第Ⅱ式と第Ⅰ式）をすべて無視し，ヴェーバーが批判していることを，ヴェーバー自身の見解に仕立ててしまったのである。この訳文（およびそこに付せられている野口の注）から，ヴェーバーが呪力剥奪状況を告発し，この状況を打破するための闘争を企図しているという論旨を読みとることはまったく不可能である。野口は，明らかに，この闘争をもみ消そうとしているのである。

尾高らの誤訳群が接続法にかんする無知・無理解・無感覚に起因することについて，またこの箇所の真意については，すでに詳細に解明した（野﨑敏郎 2016: 145～148，152～157頁）。さらに，この箇所の接続法第Ⅱ式が批判的含意を担っていることについても立ちいって解明した（前掲書6: 367～369頁）。それにもかかわらず，野口は，大昔の誤読を踏襲しているのであり，これは意図的になされた仕業である。

なんにたいして「立ちむかう」のか

以上にみてきたような野口の意図的隠蔽工作の結果，『職業としての学問』のもっとも重要な論旨が韜晦してしまっている。つまり，

ヴェーバーの闘争の所在がわからなくなっている。ヴェーバーは，この講演中で，日常に立ちむかうこと[25]（MWGI/17: 101），ただ職業生活に勤しむだけでなく，「別様になす（anders machen）」こと――つまり禁欲的プロテスタンティズムとは《別の途》を歩むこと――（ebd.: 111），そして「人間として（menschlich）」務めを果たすこと（ebd.）を主張している。これは，若い聴衆に向けた闘争への誘(いざな)いである。野口の「訳」でも，これらの言葉の表面上の意味だけは伝わるが（野口訳: 68，87頁），それなら，この闘争はいったいなんの闘争なのかが，野口の「訳」ではさっぱりわからない。野口は，ドイツの大学問題にたいする闘争を否定しており，呪力剥奪の日常に立ちむかうことも否定しているからである。野口の「訳」における闘争は，相手のいない独り相撲である。ヴェーバーは，この講演の最終段落において，禁欲的プロテスタンティズムとは《別の途》を歩み，大学と近代知の問題状況に闘いを挑むことを明確に主張しているのだが，野口の「訳」にあっては，ヴェーバー自身が禁欲的プロテスタンティズムの呪縛に囚われたままということにされているので，野口のヴェーバー像にはそもそも闘争する姿勢が欠落している。野口の妄念とヴェーバーの実際の主張とは真っ向から対立しており，訳文の最後にいたるまで，まったく収拾がつかない混乱に陥っている。

この講演録の最終局面において，なにかヴェーバーが，ひたすら専門的職業労働に邁進せよと説教したかのような誤読が，長年にわたって横行してきた。実際には，彼は，まったく逆に，学生たちにたいして，職業労働に回収されない人間としての務めを果たすことから始めようと語っている。彼は，この講演録の全体において，今日の学問・科学・大学にかかわる外的諸問題と内的諸問題とを関連づけて克明に描出し，若い世代に向かって，この二つの問題にたいする闘争を呼びかけているのである。

この講演録は，それ自体が完結した体系をなしていない。それを聴いた（読んだ）者自身が，この講演録を手がかりとして，どこでどう闘うかを決断することによってはじめて充足する。したがって，読者をそれぞれの闘争へと送りだすのが，この講演録の訳者が本来果たすべき仕事である。

おわりに

本稿で指摘してきたことは，ヴェーバーの基本思想の一端であり，『職業としての学問』を読むさいの初歩的確認事項にすぎない。ところが，1936年の初訳以来，これまで「訳者」と自称してきた者たちは，この講演録にかかわる重要な史実を学ぼうとしなかった。それどころか，渡辺金一がそれらの「訳」の誤りをすでに1974年に指摘していたのに，これらの「訳者」たちは，その後の改訂において，渡辺の指摘を無視し，頑なに古い誤訳にしがみついてきた。拙著は，渡辺の仕事にふたたび光を当てるとともに，さらにそれを発展させたものであるが[26]，驚いたことに，野口は，渡辺の仕事を参照していないらしく，渡辺が葬りさったはずの尾高・出口らの誤訳を受けついでいる。

野口の「訳」は，大学において闘うヴェーバーの姿を隠蔽し，現代の大学と現代社会にたいするヴェーバーの痛烈な批判を――ときとして正反対に――ねじまげた。また，旧来の訳の誤りを指摘して正しい解釈を提供した拙著を読んでいながら，あえて尾高以来の古い誤訳へと退行した。この「訳」は，こうした隠蔽と歪曲と退行の産物にほかならない。本稿で指摘したように，野口は，彼「独自」の新たな誤訳も付けくわえ，それによって読者に虚妄を吹きこみ，読者を欺いているのである。

筆者は，すでに，『職業としての学問』の翻訳の基本条件を明示した。①ヴェーバーの用いているドイツ語を完全に理解すること，②『職

業としての学問』と密接な関連を有する他の著作（とくに大学にかんする著述）を学ぶこと，③大学人・職業人としてのヴェーバーの実像を第一次史料に依拠して把握すること，④第二帝政期におけるドイツの大学事情をくわしく学ぶこと――この四つである（野﨑敏郎 2016: 380～382頁）。『職業としての学問』を訳そうとする者は，無条件にかならずこのすべてを遂行しなくてはならない。とりわけ未公刊史料の研究は不可欠である。この講演録は，大学問題にかかわるヴェーバーの闘争と不可分に結びついているが，その闘争実態は，『マックス・ヴェーバー全集（Max Weber Gesamtausgabe）』を読むだけでは把握できない。また，マリアンネ・ヴェーバーは，大学における夫の闘争にあまり関心を寄せず，またそれをほとんど知らなかったため，彼女の書いた伝記のなかには有力な情報が乏しい。そこで，ベルリン，カールスルーエ，ヴィーン，ミュンヒェンそれぞれの文部官僚の動向，ヴェーバーが勤務した大学組織の動向，彼の同僚たちの動向，またその他の周辺諸事情を洗いだす必要がある。この作業を経ないと，彼がどういう状況におうじてなにをめざしていたのかがみえてこないのである。ところが，この方面の重要資料の大多数は，公刊されたかたちで読むことができないから，未公刊史料の研究がどうしても必要である。これは，事柄の性質におうじて（sachlich）決定される事項であって，未公刊史料の研究をせずに訳してもかまわないという理由はどこにもない。『職業としての学問』の翻訳にさいしては，こうした特殊な制約・束縛が訳者に課せられるのである。

従来の自称訳者たちは，この努力を怠っていたために，『職業としての学問』を理解できなかった。そして野口は，拙著を読んでいながら，そこに明示されている翻訳の条件を無視したのである。

拙著刊行後，いくつかの反響があったが，拙著を読んだはずの人々において顕著なのは，『職業としての学問』が当時のドイツの大学問題と不可分に結びついていることにたいする無知・無関心である。あるいはむしろ，この重要な問題にたいする《無感覚》と評するのが適切かもしれない。書評においても，ドイツの大学問題に一言も言及されないという有様である。この講演録において，ヴェーバーは，〈脇目も振らずにひたすら研究に励め〉などという末人的主張を斥け，大学人が人間としての務めを果たすことを求め，またそれをみずから実践した。ただ研究と教育に没入するだけでなく，ヴェーバーは，文字通り《別の途》を歩みつづけたのだが，それはいまなお――一般には――知られていない。この闘争する大学人ヴェーバーの生きた姿を克明に描きだすことは依然として急務である。

注

1） 本稿では，紙幅の関係で，日本におけるヴェーバー理解に絞って考察するが，こうした問題性は，日本のみならず，ドイツ他におけるヴェーバー理解の問題性とも係わっていると思われる。

2） この「仕事」という珍訳は，英訳者の陥っている迷妄を踏襲したところに捻りだされたものである（野口訳: 8～9頁）。

3） 当該箇所で引用されているトルストイの『なにをなすべきか』は，現代科学および現代の科学者にたいする痛烈な批判を展開した著作であり，ここのWissenschaftは「科学」を意味する。野口のように「学問」と訳したのではトルストイの文脈と繋がらない。

4） この経緯は拙著中で詳解した（野﨑敏郎 2011: 115～137，176～206，256～272頁）。

5） こうしたスワンメルダムの信仰の見地は，十七世紀においてすでに――一般には――顧みられなくなりつつあったと思われる。したがって，スワンメルダムは，古い禁欲的プロテスタンティズムの《職業＝「召命」》観への復帰を志向した復古思想の持ち主とみなすのが適切であろう。この点についてはすでに論及した（野﨑敏郎 2016: 180～181頁）。

6） ゲーテのこうした《近代》との距離について，土橋寶は，ゲーテの世界観・人生観と神的事物

にたいする態度とを考証し，ゲーテは，「近代哲学の世界観一般から距離を取って」おり，近代哲学にたいして「真理に対する独自の要求を対置している」と指摘している（土橋寶 1999: 141頁）。

7）紙幅の関係で，ここでは立ちいった考証をしない。ゲーテの思想にかかわるこうした論点については，別途考究する予定である。

8）トルストイについて，ヴェーバーはまとまった論稿を書こうとしていたが，それは果たされず，「二つの律法のはざま」にかんするゲルトルート・ボイマー宛書簡のなかで，ごく限られたかたちで述べられるにとどまった（MWzG: 240f., MWGI/15: 97f.）。

9）ヴェーバーが，神秘主義的なものを「精神的麻酔剤」として峻拒したことについては，オットー・クルージウス宛書簡を参照（1918年11月24日付，MWGII/10: 319）。

10）既存の邦訳者のなかでは，三木正之のみが，①学科主任との打ち合わせ，②著書，③試問という順序を正しくしめしているが，やはりその試問を「形式的な」ものと誤認しており，また，教授資格を得てから「講義（Probevortrag）」をするかのように誤認している（三木訳: 3頁）。

11）渡辺が「～のちに」と訳している前置詞nachを，筆者は「～にもとづき」と解している（野﨑敏郎 2016: 5頁）。教授資格申請者は，形式も内容も，分野代表者の指示にもとづき，それにしたがって，教授資格請求論文（Habilitationsschrift）を執筆しなくてはならないからである。たとえば，辞書には，nach ärztlichen Vorschriften leben（医者の指示どおりの生活をする）という用例がある（小学館『独和大辞典』第二版）。ただ，渡辺のように，「～のちに」と訳すことが誤りだと言うのではない。

12）ここでヴェーバーは「ひとつの大学において」と言っているが，厳密には「ひとつの学部において」である。私講師資格は，ひとつの大学のなかのひとつの学部に限定された資格であり，私講師は，ひとつの学部に雇用された者である。ただ，次注にしめすように，例外があるので，ヴェーバーは「ひとつの大学において」と表現したのであろう。

13）私講師も正教授も，ひとつの学部に所属している存在であるが，諸事情によって，例外的な事態が生じている。ヴェーバーがフライブルク大学哲学部に赴任したとき，彼は法学部学生対象の法制史講義も受けもっている。その後彼が移籍したハイデルベルク大学では，以前から，哲学部と法学部との科目相互乗り入れが制度化されていた（野﨑敏郎 2011: 37, 81～92頁）。ほかに，講義担当者の他出・病休・死去等の理由により，重要な講義を開講できそうにない場合，他の大学に勤務している私講師を，期限つきでレンタル移籍させるケースもある。こうしたケースでは，その私講師が所属している（＝その私講師が教授資格を取得した）学部の承認が不可欠である。

14）複数形のMenschlichkeitenが「人間的弱点」を意味することはすでに解明した（野﨑敏郎 2016: 44～45頁）。

15）一般に，バーデン政府とヴェーバーとの関係は良好だったと思われている。しかし実際には，ヴェーバーとバーデン政府とのあいだにはほとんどつねに大きな緊張関係が存在していた。このことは，両者間で交わされた書類を筆者が点検していて驚かされたことである。

16）レーデラーは，1922年から1925年まで，東京帝国大学で教鞭を執った。このとき彼は，ハイデルベルク大学にあっては休職扱いとされていた。

17）パーシー・ゴートハインは，『職業としての学問』再講演（1919年1月27日）の聴衆のひとりであった（Löwith 1986/2007: 18）。

18）カントロヴィッツは，この当時フランクフルト大学嘱託教授であった。彼は，パーシー・ゴートハインと同様，ゲオルゲ・クライスに属したことがあり，また，1921年に彼がハイデルベルク大学で学位を取得したときの指導教授は，奇しくもパーシーの父エーベルハルト・ゴートハインであった。

19）ひとつ断っておくと，筆者は，この件にかんして，ゴートハインを拒絶したプラッツホフを責めようとするものではない。むしろ彼は，分野代表者として責任ある対応をなし，また分野と学部と学生との利益に目配りをして，合理的な判断を下したと思われる。

20）この書簡のやりとりをしているとき，ベッカーは，プロイセンの文部大臣を辞した直後であった。

21）シェーンベルクは，第二帝政期にも，1911年から第一次世界大戦勃発時まで，ベルリンのシュテルン音楽院に勤務していた（Nono-Schoenberg 1998: 88）。

22）シュレーカーとシェーンベルクは，1933年に追放命令を受ける（Nono-Schoenberg 1998: 302）。シェーンベルクは，いちはやくフランスに逃れ，その後渡米する。シュレーカーは追放の翌年に亡くなる。レーデラーとカントロヴィッツは，シェーンベルクと同様アメリカへ亡命する。一方，プラッツホフは，歴史学界におけるナチズムの重要な担い手となる。なお，グンドルフは，ナチスが政権を掌握する以前の1931年に亡くなっている。

23）この講演録の最終部分における筆者の解釈に難点があったので，『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版）』の刊行直後にウェブサイト上で訂正し，また拙稿において，当該箇所の論旨が，《ヴェーバー⇔トルストイ》の二極対置ではなく《ヴェーバー⇔仮構された存在⇔トルストイ》の三極対置において展開されていることをしめした（野﨑敏郎 2016-（1）: 18～19頁）。

なお，拙著（拙訳）にはほかにも不備があることが判明したため，現在改訂版を準備中である。

24）ヴェーバーは，その見地においても行動においても，明らかにトルストイから一線を画している。では，彼の思想と行動はトルストイとどのように異なるのかが，当然にも関心の的になる。しかし，これはもはや本稿の持ち分を超えており，紙幅も尽きたので，別稿に譲る。

25）「かかる日常に立ちむかう（einem solchen *Alltag* gewachsen zu sein）」の「立ちむかう（jm. gewachsen sein）」を，尾高や出口は「堪えること」と誤訳していた（尾高訳: 57頁，出口訳: 395頁）。これにたいして，矢野善郎は，この箇所の含意について，受動的な受忍ではなく，「『日常』への能動的な対決の姿勢」をしめしたものであることを解明した（矢野善郎 2000: 71～73頁）。これは，矢野による重要な貢献である。

なお，三木正之は，すでに1992年に，「そうした日常に立ち向かいうるかどうかということ」と正確に訳していた（三木訳: 31頁）。おそらくこれが，この箇所にかんする最初の正しい邦訳である。

26）ここでは詳述しないが，渡辺の注釈のなかには，筆者の見解と異なるものもある。

未公刊史料一覧

GLA235/2226：Grossherzogthum Baden. Ministerium des Kultus und Unterrichts. Universität Heidelberg. Diener. Lefmann, Dr. phil. Salomon. Generallandesarchiv Karlsruhe

GStAPK/VI. HA, Nl Becker, Nr. 2343: Platzhoff, Walter, Dr. phil., Prof. für mittlere und neuere Geschichte. Geheimes Staatsarchiv preußischer Kulturbesitz

MMSB/GK/B77: Briefe von Immanuel Birnbaum an Georg Kerschensteiner. Monacensia (Münchner Stadtbibliothek)

StAH/361-5I/1201: 361-5I Hochschulwesen I. Vorlesungswesen 1201. Besetzung der ständigen Professur für Nationalökonomie, Verhandlungen mit auswärtigen Dozenten 1904-07. Staatsarchiv Hamburg

UAH/PA4780: Diener und Dienste Acta personalia. Dr. Lederer, Emil 1912-1933. Universitätsarchiv Heidelberg

UAH/IV-102/130: Akten der philosophischen Fakultät 1898/99. Universitätsarchiv Heidelberg

文献一覧

Baumgarten, E.(Hrsg.) 1964: *Max Weber; Werk und Person*, Dokumente ausgewählt und kommentiert von E. Baumgarten. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck). 生松敬三訳 1971『マックス・ヴェーバー 人と業績』福村出版

Birnbaum, I. 1974: *Achtzig Jahre dabeigewesen; Erinnerungen eines Journalisten,* 2. Aufl. München: Süddeutscher Verlag

ETGS4: Troeltsch, E., *Gesammelte Schriften, Bd. 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1925. 内田芳明訳 1959『ルネサンスと宗教改革』岩波書店

GWH3: Goethe, J. W., *Goethes Werke; Hamburger Ausgabe in 14 Bänden, Bd. 3. Dramatische Dichtungen I*, 12. neubearbeitete Aufl. München: C. H. Beck, 1981. 山下肇訳 1992『ゲーテ全集3 ファウスト』潮出版社

Löwith, K. 1986/2007: *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933; Ein Bericht,* Neuausgabe. Stuttgart: J. B. Metzler. 秋間実訳 1990『ナチズムと私の生活――仙台からの告発――』法政大学出版局

MWGI/13: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 13. Hochschulwesen und Wissenschaftspolitik. Schriften und Reden, 1895-1920.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2016. 上山安敏・三吉敏博・西村稔編訳 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社

MWGI/15: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 15. Zur Politik im Weltkrieg. Schriften und Reden, 1914-1918.* Tübingen: J. C. B. Mohr（Paul Siebeck）, 1984. 中村貞二他訳 1982『政治論集（1・2)』みすず書房

MWGI/17: *Max Weber Gesamtausgabe, I, Bd. 17, Wissenschaft als Beruf 1917/1919 - Politik als Beruf 1919.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck）, 1992

MWGII/3: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd. 3. Briefe 1895-1902.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2015

MWGII/10: *Max Weber Gesamtausgabe, Abt. II, Bd. 10. Briefe 1918-1920.* Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 2012

MWzG: König, R. u. J. Winckelmann (Hrsg.), *Max Weber zum Gedächtnis; Materialien und Dokumente zur Bewertung von Werk und Persönlichkeit.* Köln u. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1963. ホーニヒスハイム (P)〔大林信治訳〕1972『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房

Nono-Schoenberg, N (Hrsg.) 1998: *Arnold Schönberg, 1874-1951: Lebensgeschichte in Begegnungen.* Klagenfurt: Ritter

NSWK6: Nietzsche, F., *Sämtliche Werke in zwölf Bänden, Bd. 6. Also sprach Zarathustra; Ein Buch für Alle und Keinen.* Stuttgart: A. Kröner, 1964. 吉沢伝三郎訳 1993『ニーチェ全集第9・10巻 ツァラトゥストラ』筑摩書房

NWS3: Nietzsche, F., *Werke in drei Bänden, Bd. 3,* herausgegeben von Karl Schle-chta, Lizenzausgabe. Darmstadt：Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1997. 川原栄峰訳 1994『ニーチェ全集第15巻 この人を見よ 自伝集』筑摩書房

Schwab, F. X. 1917: Beruf und Jugend. *Die weißen Blätter; Eine Monatsschrift,* Jg. 4, H. 5

Verhandlungen II: *Verhandlungen des II. Deutschen Hochschullehrertages zu Jena im September 1908* (Sonderabdruck aus der "Beilage der Münchner Neuesten Nachrichten"). München：Knorr & Hirth, 1908

WL6: Weber, M., *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre,* 6., erneut durchgesehene Auflage, herausgegeben von J. Winckelmann. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1985

今井弘道 1988「自律的『人格』と公的判断――〈ウェーバーにおける実践的判断〉のための試論的考察――」名古屋大学『法政論集』119

尾高訳: 尾高邦雄訳 1980『職業としての学問（改訳)』岩波書店

大村眞澄 2018「M・ルターのBeruf概念」キリスト教史学会編『マックス・ヴェーバー「倫理」論文を読み解く』教文館

出口訳: 出口勇蔵訳 1982「職業としての学問」『完訳・世界の大思想1 ウェーバー 社会科学論集』河出書房新社

土橋寶 1999『ゲーテ世界観の研究――その方法と理論――』ミネルヴァ書房

中山訳: 中山元訳 2009『職業としての政治／職業としての学問』日経BP社

野口訳: 野口雅弘訳 2018『仕事としての学問 仕事としての政治』講談社

野﨑敏郎 2011『大学人ヴェーバーの軌跡――闘う社会科学者――』晃洋書房

――― 2016『ヴェーバー『職業としての学問』の研究（完全版)』晃洋書房

――― 2016-「《闘争する人格》と大学問題――『職業としての学問』をいかに読むか――」(1-4, 連載中）佛教大学『社会学部論集』63(2016), 64(2017), 65(2017), 67(2018)

三木訳: 三木正之訳 1992『訳稿ドイツ講演選』私家版

矢野善郎 2000「『西洋人』と『日々の要求』――ヴェーバーにおける科学と思想の交差点：再訪――」『情況』第二期11（6）

渡辺編: 渡辺金一編注 1974『Wissenschaft als Beruf』南江堂

（のざき　としろう
佛教大学社会学部公共政策学科）